５２	お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
	戸田　文男	男　性	８３歳	１８歳	八束穂

手記　「戦艦大和　１６才の水兵さん」より抜粋

※　表現を分かりやすく変更させていただきました。

「戦艦大和乗組員として」

寄せ書きの日の丸をタスキにかけ，母がぬってくれた千人針を腹に巻き，奉公袋*1 を手に，村人が振る旗の波と歓呼の声に送られて，「一身を投じ，お国のために尽くします。」とちかって田舎を後にしました。広島県大竹海兵団に入団したのは，昭和１８年４月，１５歳の春でした。（各地から集まった約１，０００名，約１００日の厳しい訓練を受けた後，配属先が軍艦大和に決定しました。）

海兵団を後にした私たち約１００名は，その日のうちに瀬戸内海兜島沖に停泊中の大和に乗り組み，南洋諸島トラック基地に向けて出港した。昭和１８年７月２５日のこと。美しい瀬戸内の島々を後に，同航の駆逐艦，巡洋艦が右へ左へとあわただしく展開し始めた。大和を護衛する陣形を組む。いよいよ戦場に向かうのだ。これが最後かもしれない。暗やみの星空をじっと見つめ，

「お母さん，さようなら！」と心の中でひと言……。

翌日，艦橋のトップに上がっておどろいた。「うぇー，高い。」艦首が１５０ｍ先で，白波を切っている。甲板には，３，０００名が集まるそうだ。静かな海を艦隊が陣形をくずさず，速力２０ノットでトラック島に向け南下している。

瀬戸内を出港して５日目。トラック基地に入港した。この島々は，それぞれ春夏秋冬の名をもらい，陽炎にゆらいで浮いてみえる。さっそく訓練が始まった。一番のなやみは，艦のそれぞれの名称をいち早く覚えることだ。長さ２６０ｍ，幅４０ｍ，高さ５０ｍ，７３，０００トン。超ど級の戦艦の中身を知るのは大変なことで，夜遅くまで艦内を探索した。何がどこにあって，どう行けばよいのか分からず，四苦八苦した。

私の配置は，２番主砲砲台長付き通信員だ。役目は，艦橋トップの射撃指揮官からの指令を電話で受け，砲全員に知らせる伝令員で，責任重大だ。重さ３，３００トンの砲塔を動かす水圧のうなり，１発１，５００キロの砲弾３発を装てんする油圧の音，それぞれの機械音の中での

「昭和の歴史　第六巻（集英社）より」

▲　巨大な戦艦大和

*1　Ｐ－２８－参照。軍人として必要な最も重要な物を入れた袋。

伝令となる。並の声ではダメだと，夜，甲板で遠くにうかぶ夏島までとどけとばかり，毎晩発声訓練をした。

▲　**戦艦大和**　　（写真提供：東海大学　鳥飼行博氏）

「戦　闘」

昭和１９年１０月，アメリカ軍がついにレイテ島に上陸した。我が軍は，栗田中将率いる第一遊撃隊（戦艦７，巡洋艦１３，駆逐艦１９），志摩中将率いる第二遊撃隊（巡洋艦３，駆逐艦４隻）がスマトラのリンガ泊地らブルネイに進出し，臨戦態勢に入った。他方，内地から小沢中将率いる空母４，戦艦２，巡洋艦３，駆逐艦６隻が機動本隊となって南下した。この部隊がおとりとなり，敵機をおびき寄せる。そのすきに遊撃隊がレイテ湾に突入する。一挙に敵大船団を壊滅する作戦で，わが連合艦隊の一大決戦となる。

これより４ヶ月前のマリアナ沖海戦*1 で，日本軍は空母３隻を失い，４隻を損傷した。そのため今今は航空機の支援なしと聞き，大丈夫だろうかと思った。レイテ湾に突入する前に，グラマン艦上攻撃機と勝負することになる。

１０月２２日，４６隻がブルネイを出撃，一路レイテ湾に向かう。翌２３日未明，パラワン島沖で巡洋艦，愛宕，摩耶が，アメリカ軍の潜水艦によって撃沈された。幸先が悪い。（日本海軍には，潜水艦探知用ソナーがない。夜間も双眼鏡の見張りでは，暗やみの洋上で潜望鏡を発見するのは至難のわざだ。電波兵器の遅れで，日本海軍は決定的な敗北をきっすることになった。）

夜明けを待って栗田中将が駆逐艦から乗り移り，大和が旗艦*2 となった。２３日午前，大和の電探が敵機の編隊をとらえ，対空戦闘のラッパが鳴りひびいた。大和は最速の２８ノットに加速した。敵編隊までの距離は，３万メートルという。

「左対空戦闘３００度，高角２０度，旋回中のグラマン艦攻」

「照準砲測独立，打方独立発射」（照準は指揮所に，発射は各砲に任す）

---

*1　マリアナ沖海戦（昭和１９年６月１９日～２０日）　日本艦隊７１隻，アメリカ艦隊８７隻がマリアナ群島西で対峙し，互いの航空機による艦隊のつぶし合いとなった。日本艦隊は，空母７隻のうち３隻を失い，４隻が損傷，航空機３９５機（９５％）を失った。

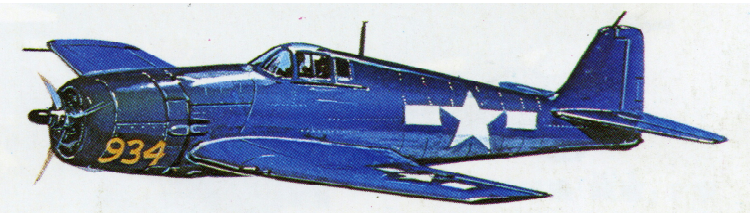
*2　艦隊の司令官が乗っていて、艦隊の指揮をとる軍艦。マストに司令官を示す旗を掲げる。

「３式対空弾用意」……

次々に砲戦号令が下る。指令通り，大きな声で復唱，各員に伝える。今まで苦労してきたのも今日のためだ。体が震い立つ。目標までの距離２万メートルにせまる。

「砲撃始め」の合図で，全艦いっせいに火ぶたを切った。

▼ グラマンＦ６Ｆ３ヘルキャット艦上戦闘機



戦争後期，艦隊での航空作戦を有利に導いた戦闘機。戦争末期には，空母から発進して日本を直撃した。

「昭和史　第７巻（研秀出版）より」

わが主砲からは，４０秒間隔で１トン半の弾が次々に出て行く。音や振動で失神している暇などない。集中攻撃で，敵編隊がばらけてきた……。「弾着は非常によい。がんばれ！」指揮官のキンキン声だ。敵機は編隊を解き，突っ込んでくる。「主砲，副砲打ち方やめ。」「高角砲，機銃打ち方始め。」

高角砲２４門，機銃１１７門と交代。ドンドン，バリバリの始まり。３～４分で敵機が真上に来る。爆音が聞こえる。どれが撃つ音，当たった音，何が何やらさっぱり分からない。見張り員の甲高い声，「右正横雷跡」，魚雷がさざ波を立てて突っ込んでくる。面舵いっぱい…左からも…取り舵いっぱい…艦が大きく傾く。魚雷が艦すれすれに走り去る。舵取りが激しいので，砲の照準が狂う。約３０分で一次攻撃隊が去った。

見れば，前部左舷に爆弾が命中していた。穴が開き，浸水がひどい。「応急員，前部に急げ」……必死の防水作業が始まる。艦橋周辺の機銃員が戦死したらしい。

引き続き，２波，３波と敵機の攻撃が続いた。敵機の撃墜も多いが，艦の被害も大きい。夕暮れ時，戦いが終わった。戦死者は，戦時死体収容所（兵員浴室）に集められて，水葬*1 を待つ。生まれて初めての戦い，訓練は限りなく長く続くが，戦闘はあっという間のできごとだった。

明けて２４日，早朝からグラマン機の攻撃が続く。我が方も昨日と同じ主砲，副砲，高射砲，機銃の全火力で応戦する。午前の１，２波に対する砲火に比べ，午後の３波に対する機銃の音が少ない。どうしたのであろう。見ると，連続発射で真っ赤に焼けた銃身を交換している。死傷者でだれもいなくなった砲もあれば，全力で弾を補充している砲もある。甲板は，まさに戦いの修羅場と化している。たまには日の丸機を見たいが，１機も来ない。

突然，武蔵があぶないと連らくがある。近づいてみると，すでに前甲板は水面に洗われ，乗員は甲板で整然と並んで駆逐艦の横づけを待っている。妹，武蔵*2 の最後を見とどける暇はない。一路レイテ湾に向かう。

---

*1　死体を処理する方法の一つ。死体を水中に役げ込んで葬ること。

*2　戦艦大和と戦艦武蔵は，ともに不沈艦といわれ，姉妹艦とされていた。

……就役３年目で，妹（武蔵）がシブヤン海に消えた。

２日間の波状攻撃で，我が艦隊の被害が大きい。一体，上層部は敵艦隊の居所をつかんで作戦を立てているのであろうか。我々には分からないが，２日でのべ２００機以上の敵機が来襲した。

出撃３日目の夜明け，湾の入り口に着く。その時，他の洋上に多くのマストを発見した。視界不良で艦種がはっきりしない。たぶん，第二遊撃隊であろう。よくも健在で……。と思いきや，スコールの雨間から見え隠れする目標は，何と敵艦隊だ。距離が近い……「戦闘開始」……

水上戦は日本海軍のお家芸。栗田司令官の「列を解き，全艦突入せよ」の命令で，艦首のない巡洋艦，艦橋が半分の駆逐艦，火災の艦等，痛手をものともせず，全速で敵陣に突っ込んで行く。グラマンのお返し魚雷戦だ。（日本海軍には，９３式魚雷といって，速力が速くて軌跡がない，他に類を見ない魚雷があった）

「左，砲戦３００度，同航の航空空母」

「発射用意～撃て」……２～３００ｍの水柱を上げ初弾。次弾が命中。敵駆逐艦が勇敢にも突進してくる。敵味方の状況がさっぱり分からん。

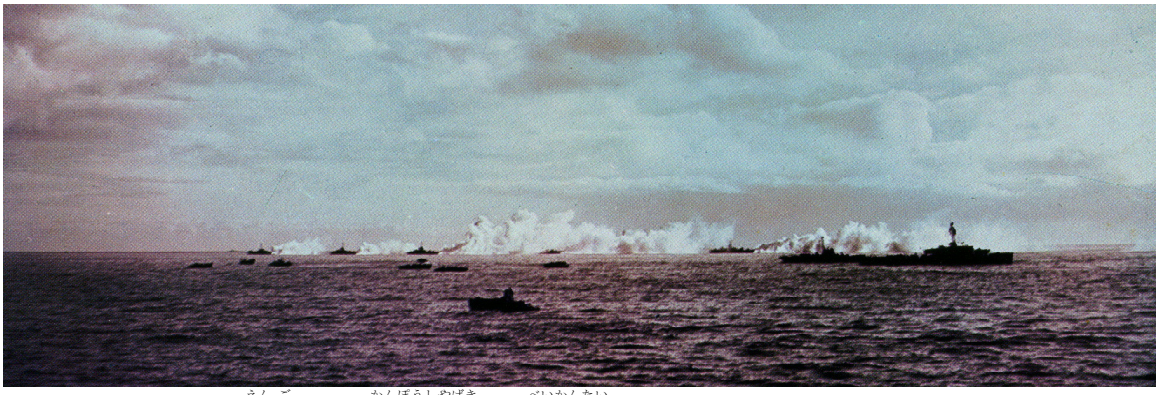
「追跡止め。集まれ針路００度」…北上する。集合艦はアレッ，これだけか！無理もない。３日３晩の対空，対潜，対水上戦闘だもの。

編隊を組む艦は，皆満身創痍。これではレイテ湾突入は無理か……

（突入しなかった理由，栗田長官無言）

夕やみせまる頃，対潜警戒を行いながら「水葬用意」の指令が下る。各分隊，戦死者を収容所から持ち帰り，軍装に着がえさせ，一人ではさびしかろうと，二人一組で毛布にくるみ，後部甲板に集まる。念仏を唱えながらダビットに吊り，ロープを切る。…海中深く旅立っていく。…南無阿弥陀仏…

１０月２８日，１週間ぶりにブルネイに帰ってきた。艦は，出撃時の半分。このフィリピン沖海戦で，事実上連合艦隊は壊滅である。艦対艦の砲戦術が優れていても飛行機には勝てなかった。



▲　**レイテ島上陸援護のため艦砲射撃中の米艦隊**　　「昭和の歴史　第７巻（集英社）より」

レイテ沖海戦について　　昭和１９年１０月２３～２６日

アメリカ軍のマッカーサー率いる陸軍輸送船団がフィリピン，レイテ島に強行上陸をめざした。湾内の米軍輸送船団を壊滅する目的で，日本連合艦隊４６隻がブルネイ基地から出撃した。しかし，日本艦隊はアメリカ軍航空機の反撃を受け，戦艦武蔵以下半数の艦を失い，大打撃を受けた。アメリカ艦隊の損害は軽微で，レイテ島上陸は，ほとんど妨害を受けずに進められた。

レイテ沖海戦　実際の戦果の比較

日本側の損害	沈没：戦艦３隻，空母４隻，重巡６隻，軽巡３隻，駆逐艦７隻
	大破：重巡５隻，駆逐艦１隻
米軍の損害	沈没：護衛空母１隻，駆逐艦３隻
	大破：護衛空母１隻，駆逐艦１隻

真実を伝えない新聞　　昭和１９年１０月２８日　朝日新聞

空母十五戰艦一など
艦船廿七隻を撃沈破
我方敵き損害　空母巡艦等六隻

赫々相次ぐ戰果
フイリピン沖海戦

我が潜艦も強襲

巡驅艦輸送船など
六十四隻撃沈破
廿五日夜間　廿六日午前
レイテ灣戰果

敵損害既に百八隻